

太宰治「トカトントン」論

——磔刑の音に消される「トカトントン」の幻聴——

巖 大 漢

「トカトントン」〔群像〕昭22・1〕は、問題点の明瞭な作品である。すなわち、〈私〉を悩ます「トカトントン」という幻聴とそれを鳴り止ませるものとして某作家が処方する「マタイ伝」十章二十八節「身を殺して靈魂をこらし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」の関連を読み解くところに、この作品の読解の要点は絞られるのである。

もつとも、これまでの先行論においても、両者の関連様相は、解決すべき最優先課題とされてきた。しかし、先行論では、残念ながら、その関連様相の内実を的確に把握するまでには至っていない。

たとえば、某作家は、〈私〉の幻聴の理由を正確に掴み取ったうえで「マタイ伝」十章二十八節を処方するのだと説く遠藤祐氏は、「トカトントン」の幻聴が「彼本来の魂がみずからの所在を忘れさせないために発するひびき」であると傾聴すべき指

摘をしているが、「マタイ伝」の一句との関連については、〈神をおそれ、神に従う〉ことを〈私〉に伝えようとしているのだという、聖書学が説くものを踏襲した結論を見出すのみに終っている。また、〈常に当事者たり得ない〉〈他者性〉をもつ〈私〉の内面のために幻聴は聞えてくるのであり、某作家もそれを精確に掴み取ったうえで「マタイ伝」を処方したと説く金美亨氏は、某作家は「マタイ伝」の一句を通して「人間などは恐れるに足りない、という結論を青年に示唆している」のであり、それはまた「作者太宰治が伝えようとしたメッセージである」と結論付けるのだが、これは氏の当該句に対する誤解の上に成り立つものでしかない。

幻聴と処方に関連を「トカトントン」の作品世界に即して読み取った場合、某作家は〈私〉の「トカトントン」の幻聴を「マタイ伝」十章二十八節に含意されているイエスの磔刑の音——「トカトントン」と対比させている。〈私〉をして「身動きが出来な」くさせている「トカトントン」の幻聴をイエスの磔刑の音——「トカトントン」によって引つ込ませ、イエスを模範にし、茨の道に向かって出発することを促しているのである。そし

て、某作家が「私」に伝えたものはまた、太宰から戦後日本へ向けられた「再生の原理」であつたと見受けられるのである。以下、今述べたことを詳述してみたいと思う。

二

「トカトントン」の幻聴の正体は、この「トカトントン」というオノマトベが敗戦直後の時代状況において内包していた一般的な観念を先に確認しておいた時により見えやすいので、先にそれを押さえておきたい。

その時、実際ちかくの小屋から、トカトントンといふ釘打つ音が聞えたのです。この時の音は、私の幻聴ではなかったのです。海岸の佐々木さんの納屋で、事実、音高く釘を打ちはじめたのです。トカトントン、トントントカトン、とさかに打ちます。私は、身ぶるひして立ち上りました。

ここでは、「トカトントン」作中の一場面を引用した。そこには、「トカトントン」が「釘を打ちはじめ」る時に出る音（「トカ」という音は、釘を材木などに最初に軽く固定する際の音、二重傍線は弾みをつける音」とある。この「トカトントン」という音を発する釘を打つ行為は、物を作ったり直したりする行為である。ところで、この釘を打つという行為は、この場面で明示的に示されているわけではないが、たとえば、「既に家は焼かれ、父と兄と嫂と三人、その焼跡にあはれな小屋を建てて

暮らしてゐました」「こんどの空襲で豊田さんも全焼し、それに土蔵まで焼け落ちたやうで、実にお気の毒です」と作中に頻出する空襲とその焼跡からの再建の行為が示すように、当時の時代状況下では、戦争によって壊れた何物かを壊れる以前の状態に取り戻す行為と見てよい。すなわち、「トカトントン」とは、終戦直後の当時の社会においては、「修復」「復旧」を強く含意する音であつたのである。³

本作「トカトントン」における「トカトントン」という音の意味作用もこれと同様である。

ああ、その時です。背後の兵舎のはうから、誰やら金槌で釘を打つ音が、幽かに、トカトントンと聞えました。それを聞いたとたんに眼から鱗が落ちるとはあんな時の感じを言ふのでせうか、悲壮も厳肅も一瞬のうちに消え、私は戀きものから離れたやうに、きよろりとなり、なんともどうにも白々しい気持で、夏の真昼の砂原を眺め見渡し、私には如何なる感慨も、何も一つも有りませんでした。

「私」が「トカトントン」の音を聞く最初の場面である。「無条件降伏」のラジオ放送の後、軍人精神を説き、徹底抗戦を促す中尉の演説に感動し、「死なう」「死ぬのが本当だ」と思っていたところに「トカトントン」という「金槌で釘を打つ音」が聞えて来たわけだが、この突然の雑音によって、「私」には「白々しい気持ち」だけが残ってしまった。なにゆえに「私」の感情はこの「トカトントン」の音一つでこつとも簡単に変化し

てしまつたのか。

注目すべきは、この感情変化について、「眼から鱗^{うろこ}が落ち」「憑^つきものから離れた」と、そもそも将校の演説が価値の無いものであったと言っているところである。「終戦までただも毎日々々、穴掘りばかりやらされてゐました。それでもたまに半日でも休暇があると町へ出て、あなたの作品を捜して読みました」と回想されるように、それまでの軍隊生活に何ら価値を認めてなかった《私》にとつては、当然の結末である。ようするに、この《トカトントン》は、将校の演説に感動し、その一瞬の感動によつて壊れてしまひそうになつていた《私》の精神世界を彼元来の精神世界へと取り戻す作用をしたのである。

三

問題は、こうして《私》は自決せずに済んだのであり、そこから戦後という時代が始まつたわけだが、それ以降、彼が「何だかひどく得意な満足の気持で、労働は神聖なり、といふ言葉などを思ひ出し、ほつと溜息をついた時」「自分の行くべき一条の光りの路がいよいよ間違ひ無しに触知せられたやうな大歓喜の気分になり」「死んでも忘れまいと思つたら」「何か脱皮に似た爽やかさが感ぜられ、これだと思つたとたんに」と語られるとおり、人生の生き方を決めようとするたびに「どこからとも無く、幽かに、トカトントンとあの金槌の音が聞えて来」て、それまでの感動や興奮を瞬時に奪い去り、「何ともはかない、ばからしい気持」だけを残してしまふことにある。いうなら

ば、《トカトントン》が《私》の人生の選択肢をそのたびに《破壊》してしまつていたのである。

《私》が《精神的》なものを高く評価し、自己を精神的な人物として位置づけていることは、たとえば、「平凡な日々の業務に精励するといふ事こそ最も高尚な精神生活かも知れない」「この伯父は専門学校を出た筈の男ですが、さつぱりどこにもインテリらしい面影が無いんです」というところからもすぐ気付くことだが、この《トカトントン》の幻聴に阻まれ、次々と人生の生き方を破壊されていくことによつて、「感激し、奮い立とうとする」その対象が、「小説家」「最も優秀な郵便局員」「労働者のデモ」「スポーツ」へと、当初の高尚で精神的だと思つていたものから凡俗で肉体の関与度が強いものへ段々と移行し、いまや「闇屋」という当初の彼としては予想もしなかつたことまで考えるようになっていて、《私》をして「日ましに自分がかくぢらないものになつてゆくやうな氣」にさせてしまふのもこの《トカトントン》である。そして、時間が進むにつれてますます《トカトントン》の幻聴が頻度を増し、《私》のほとんどあらゆる日常生活に余すところなく侵食し、《私》は「現にこの音のために身動きが出来ないで困つてゐる」のである。ところが、これはあくまでも《私》の訴えであつて、某作家の捉えた《トカトントン》ではない。某作家の返事は、「氣取つた苦惱ですね。僕は、あまり同情してはゐないんですよ」という、《私》の期待を裏切る言葉から始まつている。某作家は《トカトントン》をどのようなものとして捉えていたのか。

今夜これから最後の章を書くにあたり、オネーギンの終章のやうな、あんなふうの華やかな悲しみの結び方にしようか、それともゴーゴリの「喧嘩噺」式の絶望の終局にしようか、などひどい興奮でわくわくしながら、銭湯の高い天井からぶらさがつてゐる裸電球の光を見上げた時、トカトントン、と遠くからあの金槌の音が聞えたのです。とたんに、さつと浪がひいて、私はただ薄暗い湯槽の隅で、じやぼじやぼお湯を掻きまはして動いてゐる一個の裸形の男に過ぎなくなりました。

まことにつまらない思ひで、湯槽から這ひ上つて、足の裏の垢など落して、銭湯の他の客たちの配給の話などに耳を傾けてゐました。

《私》が最初に幻聴を聞く場面を引用した。長年の夢であつた小説家になるための第一歩を踏み出す喜びにひたつてゐるところに「トカトントン」の幻聴が聞えて来たわけだが、ここで注意すべきは、それが単に興奮していたからではなく、「銭湯の高い天井からぶらさがつてゐる裸電球の光を見上げた時」と、その状況が限定されている点である。この「銭湯の高い天井からぶらさがつてゐる裸電球の光」は、玉音放送と将校の演説を聞いた「昭和二十年八月十五日正午」の太陽を連想させる。この連想とあい連動して「トカトントン」が聞えて来たわけだが、これはまさに将校の演説とその直後の状況へのフラッシュ・バックではないか。

ここで《私》は、戦争に負けた帰還兵として、ましてや叔父

の居候になつてくすぶつてゐるだけの自分の現状をありありと認識することとなる。ゴーゴリが「喧嘩噺」において人生の不条理を描いたように、プーシキンが「オネーギンの終章」において人生の儚さを描き見せたみたいに自らの軍隊生活を描こうと試みていた《私》であつたが、自らの置かれた現状を自覚するにいたつて、そうした揚々とした精神状態が「さつと波がひいて」しまい、「一個の裸形の男」であることに気付くのである。「無条件降伏の日」に聞いた「トカトントン」が「ミリタリズムの幻影」を剥ぎ取り、そこから《私》の戦後が始まつたとするならば、この挫折感によつて《私》は、母の死によつて学業を中断され、軍隊に取られ肉体労働ばかりさせられるといった外的要因によつて抑圧されていた、いや、むしろそうした抑圧があつて肥大化していった《精神的な私》という自己幻影を剥ぎ取られてしまつたのだと言ふことが出来る。つまり、この「トカトントン」によつて、抑圧があつてこそ肥大化していった《精神的な私》という虚像は破壊され、《私》は己の真の姿に向き合わされたのである。それまでの他人や国家の意思に呪縛された人生から、自らの意志で自分の新しい生き方を見つけ、自らの力でその道を切り開く、人間本来の姿に《私》は取り戻されたわけである。

ところが、ここで注目すべきは、己の自己幻想に深く傷を負つたにもかかわらず、自らをどこまでも《精神的》と見做そうとする《私》の性癖が、それを「まことにつまらない思ひ」と意識操作することでその傷手から眼をそらし、《精神的な私》という虚像を守り抜いてしまつたことである。辛い境遇に直面

すると、それを「つまらない」と意識操作することで、その現実から目をそらし、《精神的な私》という自己幻想を守り抜くとする《私》の性格が知れるわけだが、こうした《私》の人間性こそが、実は、彼が《トカトントン》の幻聴をおびき寄せしてしまう原因である。

私は寝不足の眼を細くして、それでも何だかひどく得意な満足の気持で、労働は神聖なり、といふ言葉などを思ひ出し、ほつと溜息をついた時に、トカトントンとあの音が遠くから幽かに聞えたやうな気がして、もうそれつきり、何もかも一瞬のうちに馬鹿らしくなり、私は立つて自分の部屋に行き、布団をかぶつて寝てしまひました。

《トカトントン》が「遠くから幽かに聞えてきたやうな気がし」たのであり、その後「何もかも一瞬のうちに馬鹿らしく」なつてしまう感情の変化に注意したい。そもそも、《私》が「獅子奮迅」と郵便局員の生活に邁進したのは、「謙讓の王冠」「最も高尚な精神生活」「最も優秀な働き手の私」と述懐されるとおりに、郵便局員としての生活それ自体を受け入れようとするものではなく、幻想的な自己の万能感を癒し、その潜在能力を他人に見せつけようとする優越意識が根底にあったことを見逃してはならない。

つまり、これは《トカトントン》によって、《私》の掴み取った生き方が破壊されたわけではない。正しくは、「最も優秀な働き手」の郵便局員としての生活に満足している自分を認めよ

うとしない《私》の心が、壊れていく自分を元の状態に取り戻そうと自らに向けて発信する音であつたのである。

ところで、それがなぜ《トカトントン》なのか。我々は、「無条件降伏の日」に聞いた《トカトントン》が、そもそも価値のない事柄や対象に憑きそうになつていた自分をその危険から救ってくれたという意味合いで《私》の中に処理されていることを忘れてはならない。つまり、郵便局員の生活に満足している今の生き方に対して疑念が生まれると、郵便局員として一生を生きることが価値がないという思いがその反動として発生し、その思いが記憶の中のあの「無条件降伏の日」の《トカトントン》という音が内包していた意味合いをこっそり仮借して現われてくるメカニズムなのである。

《トカトントン》の幻聴は、《私》が訴えるやうな、彼の人生の選択枝を《破壊》するものではなく、むしろ、その人生を選択することで壊れてしまう《優秀で精神的な私》という自己像を守り抜くために、《私》の心が意識的におびき寄せている、いわば心の安全装置であつたのだ。

四

この後に語られる花江との恋のエピソードからは、これまで確認したものととは別個の、《トカトントン》のもう一つの側面を汲み取ることができる。

《私》が恋心を寄せていた花江という人物は、終戦直前に戦災に遭つて宮城県から「遠い血筋」の親戚を頼りにAの部落に

来て、旅館業を営んでいる親戚の手伝いをしながら生活している人である。その職業柄「色と欲」の世界に住み、部落の男たちを食い物にする「凄腕」と、町の女たちから響きを買ひ、伯父からは安っぽい冗談をかけられ、からかわれている。

じつさい、つまらなさうな顔をして言ひます。ヴァン・ダイクの画の、女の顔でなく、貴公子の顔に似た顔をしてゐます。

叔父のからかいを「つまらない」と言い返す時の表情が「ヴァン・ダイクの画の、女の顔でなく、貴公子の顔に似た顔」に喩えられている。《私》が光琳の「躑躅」を観たのは『世界美術全集』（平凡社 昭3・11）第二三巻である。この「ヴァン・ダイクの画」は、その第二三巻に所収されている「ギョーム二世と其許婚」のことである。花江の顔に喩えられたその「貴公子の顔」は、無表情で愛想のかげらすら感じとれない。つまり、花江の「つまらない」という言葉は、叔父の冗談を冗談でかわした反語ではなく、本心から出たものであったのである。若い一女中が地域の権力者に本気で言い返せるのはどうしてなのか。また、伯父はどうしてそれに懲りず、花江が貯金に来るたびに冗談をかけるのか。この二人の間に流れる人間模様が重要である。

伯父は、花江の勤める「部落にたつた一軒しかない小さい旅館」の「奥座敷」で「何か部落の宴会」が開かれるたびに必ず参加するのだが、ほとんどの人がアメリカからの配給で飢えを

凌ぐことに精一杯だった戦後も間もないこの時期において、「旅館の奥座敷」で開かれる宴会は限られた一握りの人たちの、特殊な世界であったということができよう。

この「旅館の奥座敷」で広げられる世界は、本作においては、この時期が戦後初めて行なわれた総選挙の運動期間中であつて、ことと強い関連性を持つ。

作中に、伯父が《私》に「自由党の加藤さん」を押すことを求める場面がある。叔父の支持する「自由党」は、「進歩党」とともに保守派の色合いの強い政党である。総選挙でこの二つの党は大勝した。とりわけ、地方で圧勝した。こうした選挙結果になった理由は、『朝日新聞』（四月十三日付け）が「民主主義は果たして生まれるか」の見出しのもと、「顔と因襲の世界」がものを言ったのだと説明するように、旧来の地域のヒエラルヒーを支える既成勢力・組織がものを言ったためであった。

「自由党の加藤さん」を押すことを求める場面は、「三等郵便局局長」として、Aという小さな地域社会のヒエラルヒーの上部に立つ伯父が、青森の選挙区内の権力構造を底辺で支える者として、部落の表をまとめる役割を担っていたことを暗示するのである。「人生、それはわからん。しかし、世の中は色と欲さあ」と言い切るところには、既得権を守るために、そのどろどろの世界を諦め半分に受け入れて生きる、伯父の姿が浮かび上がる。

さて、その権力と既得権を巡る「色と欲」の人間模様が広げられるのが、「旅館の奥座敷」という密閉した空間、秘密の空間である。女中の花江は、その世界に居合わせながら、そこを

渡り歩く叔父の姿を間近で見ていたのである。伯父と花江は「色と欲」の世界を共有し、お互いの醜態を知り尽くしている間柄なのである。

しかし、「お互ひ心易い様子」としか考えていない《私》は、伯父と花江の間に流れるこうした人間模様には気付くことはなく、伯父の冗談を本気で反駁する様子から、花江を「色と欲」の世界に身をおきながらも、プライドを失っていない人と見なすことになってしまう。

こうした花江に対する誤解は、《私》をますます彼女に惹かれていく方向へ向かわせるのだが、実際に会って話をしてみると、花江はいかにも自分が思ったとおりの人のように見える。貯金の件をただそうとすると、花江はそれが「あの通帳はね、おかみさんのもの」であり、親戚がそうしたことをするのは「とても複雑してゐる事」なので、自分では説明が出来ないとはいいつつも、課税を免れようとする親戚の策略に自分が犠牲になっていることをほのめかして、彼を納得させようとする。

《私》はそれを信じ、辛い境遇に耐えていることを涙ながらに訴えるところに、理想とする女性を見て、ついには「花江さんとなら、どんな苦勞をしてもいい」と思うようになる。

ところが、《私》の感情が佳境に達したとき、《トカトントン》という「金槌で釘を打つ」音が実際に聞えてきた。これは「海岸の佐々木さんの納屋で、事実、音高く釘を打ちはじめ」た音であった。それを聞いた《私》は「身ぶるひ」してその場をどうにかして早く立ち去ろうとする。《トカトントン》のどのような力が《私》の思いをこうも簡単に変化させてしまうのか。

この場面で《トカトントン》の音を鳴らした「佐々木さん」とは、《世間》と言い換えられよう。つまり、この《トカトントン》の音は、世間の花江に対する世間の非難を《私》に想起させるものである。《精神的》《優秀》と常に自分を位置づけ、それを他人に顕示してきた《私》である。その自分が町で「凄腕」と噂されている女性と密会しているところを見つかったら、自己の立場が台無しになってしまうのだろう。もっとも、花江に対する《私》の感情は、「女中」と「三等郵便局員」という人から卑下される境遇に身をおきながらもプライドを失っていないということへの同類意識も確かにあったが、そうした同類意識も実は、「死んでも、ひとのおもちやになるな、物質がなんだ、金銭がなんだ」との述懐されたとおり、花江を通して、《私》自身の心の深層に巣食っている他者に対する優越感を満たそうとする自己満足の方便でしかないものであったわけで、世間の冷たい目に耐える必要などもとより《私》にはないのである。「俺の知ったことか。もともと他人なんだ」と、世間から非難される前に、自分のプライドが傷つく前に、花江との関係を絶ってしまったのである。

この現実の出来事によって、それまでの《トカトントン》の幻聴が持っていた《優秀で精神的な私》を失いかけていた自分を元に戻してくれるという意味合いのうえに、一瞬の感動によって世間の謗りを蒙りそうになりかけていた自分を、その危機から救ってくれたという意味合いが《トカトントン》に付随するようになったのである。

この後に叙述されている労働者のデモや駅伝選手にまつわる

エピソードに出てくる「トカトントン」の幻聴は、この二つの思いが混合されたものである。《私》の訴えだけに眼を奪われ、そのレトリックに翻弄されてはならない。なぜなら、労働者や駅伝選手に対する数々の賛美は、実は彼らに対する優越感のまなざしのうで芽生えた、《私》自身の知性・精神性を顕示するための長広舌でしかないからである。一瞬の感動、無量の感慨に浸っていただけで、本来はそうしたものに「絶望に似たもの」を感じ、「ばかばかしい」と思っていた《私》は、いざその道に進もうとなると、彼自身が以前思っていたように、今度は他人の眼に自分がそう映ってしまうのではないかとの不安が起こり、そうした世間の批判への恐れと優秀で精神的な私という自己幻想を喪失することの恐れから「トカトントン」を呼び込んでしまっただけの話である。

手紙の最後における《私》の物言いも同様である。自分の苦悩の切実さを訴えているようで、実は、「某作家」から正面切った批判を受けることでプライドが傷つくのを回避したいばかりの、巧妙な戦略性を帯びたレトリックなのである。「私」は最後の最後まで自分のプライドを守ろうとし、世間（「某作家」）の批判を回避しようとするのである。「トカトントン」の誘惑を少しも乗り越えていない。

五

某作家は、《私》の訴えを「氣取つた苦悩」と一蹴し、「十指の指差すところ、十目の見るところの、いかなる弁明も成立し

ない醜態を、君はまだ避けてゐるやうですね」と言っている。某作家は、「精神的で高尚な私」という自己幻想を守ろうとし、世間の非難を回避したいばかりに「トカトントン」の幻聴を呼び込んでしまう《私》の人間性を見抜いていたのである。

そのうえで、その幻聴を鳴り止まず方法として「マタイ伝」十章二十八節を処方するのだが、某作家はなぜ「マタイ伝」十章二十八節を処方したのだろうか。⁽⁶⁾

「マタイ伝」十章二十八節、「身を殺して靈魂をこらし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ」は、イエスがその生前において弟子たちを招集し、罪の悔い改めを求め、神の国の到来を伝える宣教活動に弟子たちを向かわせるにあたり、彼の教えに従う弟子たちがどのような苦境に追い込まれるかを説き、その困難を乗り越える方法を解き明かす場面中の一句である。すなわちイエスは、「身を殺して靈魂をこらし得ぬ者ども」に彼の教えを伝播しようとする弟子たちが迫害されることを示唆し、その苦難を乗り越える方法として「身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者」（裁きの神）を信じてそれに立ち向かつて前に進むことを説き与えたのである。

ところが、この時弟子たちに説かれたものは実はイエス自身に向けられた言葉であつたことは後の彼の生涯が証明する。「身を殺して靈魂をこらし得ぬ者ども」によつて十字架に釘打たれつつも、その試練を「身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者」を信じる力をもつて耐えた「十字架の死」がそれである。

現在の聖書字がこの一句を「真に恐るべきものがだれであるかを教え、命をおびやかされるような状況においても神の他は

すべて恐れる必要はないこと」(7)「真に恐るべき者が誰であるかを示すことによって、死の恐怖を乗り越えさせようとする趣旨」を説いたものと理解しているのは、イエスのこの「十字架の死」が大前提にされているのであり、そこから、この一節に示されたイエスの生き様を心構えに宣教活動に向かうことを呼びかけるものなのである。

さて、ここで大事なものは、このイエスの「十字架の死」を象徴的に表わすのもまた、十字架に釘打たれる際に出る「ヘトカトントン」という音であるという点である。すなわち、「私」の「ヘトカトントン」の幻聴は、この一節に含意されているイエスの「十字架の死」を象徴する磔刑の音「ヘトカトントン」と同音だったのである。某作家は、「私」の「ヘトカトントン」をイエスの「ヘトカトントン」に対比させていたのである。

こうしてみると、「真の思想は、叡智よりも勇気が必要とするもの」と言い、マタイが伝える「このイエスの言に、霹靂を感じる事が出来たら、君の幻聴は止む筈です」と忠告する某作家の意図は明瞭である。すなわち、逆境や試練が意識の辺縁に浮かぶとそれを回避するために「ヘトカトントン」を誘き寄せてしまう「私」の生き方を、この一節に含意されるイエスの磔刑の音「ヘトカトントン」に対比させ、マタイが、また後のキリスト教伝道者がこの一節を心構えに苦難や試練に立ち向かっていったイエスの生き様に見習って出発したように、「私」も「ヘトカトントン」の前で立ち止まってしまわずに、この一節に示されたイエスの生き様を模範に、逆境を突き破って出発すること促しているのである。

某作家の思いがここにあったのは、「この場合の『懼る』は、『畏敬』の意にちかいやうです」と、当該一節における「懼る」の概念をわざわざ説明し、その上でこの一節を理解させようとしていることから再確認されよう。というのも、「私」が世間に抱く感情は「恐れ」と「優越感」である。このふたつの感情ゆえに「私」が「ヘトカトントン」の幻聴を呼び込んでしまうことは、すでに確認したとおりである。某作家はそのことを言外にほめかすとともに、「私」が世間などは恐れるに値しないと曲解し、さらなる優越感―選民意識に陥ることを防ごうとしていたのである。

だが、一つ注目しなければならないのは、「霹靂を感じる事が出来たら」と条件をつけていることである。某作家は、人間がイエスのような心を持つことが至難の業であることを知っているのである。人間が「ヘトカトントン」の誘惑に打ち勝つことがいかに難しいのかを知っているのである。だからこそ、厳しい叱咤の口調で言っているのである。勇気を振り絞って、その心の弱さを突き破り、茨の道を歩みはじめてこそ、新しい人生が幕開くことに気付いて欲しいという、祈りにも似た願いがその厳しい口調の裏に込められているのである。

六

解決すべき問題がまだ残されている。それは、このような某作家がさらに語り手によって「むざんにも無学無思想な男」と相対化されているという点である。これをどう考えればよいの

だろうか。注目したいのは、この語り手はただ単に〈私〉と某作家の手紙を読者に紹介する、黒子に徹した無色透明な語り手ではないという点である。

某作家に対するこの「むざんにも無学無思想な男」という規定は、実は、「私のやうな無学無能の人間」「頭の悪い男」などとへりくだりのポーズを取りながらも、その実、自己の精神性、インテリ性を誇示しようとする〈私〉の性癖を言外に茶化しているのであり、そのことを読者に再度思い起こさせているのである。つまり、この語り手は「学」や「思想」を観念の世界でしか理解できない〈私〉をそれを乗り越えたところの生きた生活感情として受け入れている某作家と対比させているのであり、そのことはまた、この語り手が某作家の考え方に寄り添った人物であることを示す。

もとより、「トカトントン」の語り手を作家太宰と見なすことは十分可能である。¹⁰ 太宰は、実際は太宰自身も某作家に共鳴しながらも、語り手を介在させることで、そこに存在する教示めいたもの、忠告めいたもの、人生の手引きみたいなものを自らのそれとして断言・公言することを憚っているのである。某作家が〈私〉に伝えたものは、太宰からのそれと見なしてよいのである。

では、太宰は、本作「トカトントン」の某作家と〈私〉のやりとりを通して、なにを伝えようとしたのだろうか。

本作「トカトントン」が講談社初の純文芸雑誌を目指した『群像』の昭和二年一月〈新年号〉に掲載された事実は注目されよう。昭和二年は、〈重大な試練に直面世界が見守る日

本の将来〉（まことに昭和二十二年はわれわれにとつて、極度に重大な時期に違ひないであらう）〈それだけでも四十七年は日本の歴史にとつても大切な年となるであらう〉〈わが国が敗戦国としての真の苦悩に直面するのは、本年あたりからであると云われてゐる〉¹¹といった言説から察せられるように、〈戦後〉というものの〈真の試練〉と〈真の出発〉がその年から始まるという認識が社会全般に流れていた年であつた。そしてもう一つ注目されるのは、作品の随所で確認できるとおり、「トカトントン」の〈私〉が純文芸雑誌を目指した『群像』の読者層を強く意識した人物であつたことである。

ようするに、太宰は、新年劈頭に『群像』の読者に読まれることを想定したうえで、予想される試練や逆境に怯まずに、イエスを模範に立ち向かつて前に進むことを読者に伝えているのである。太宰のこの秘めた思いに『群像』の読者が気付いたとき、タイトルの〈トカトントン〉は、再生を促す音として響いたに違いない。

戦後、廃墟の中で再出発を始めた日本社会には、〈再生の原理〉を描いた作品が次々と生まれてきた。焼跡の闇市をさまよう不良児のなかに、この世のイエスを見出す石川淳の「焼跡のイエス」（『新潮』昭21・10）、生きるがために法律も道徳も人間性さえも失っているかのように見える娼婦たちに、人間本来の姿を確認してみせる田村泰次郎の「肉体の門」（風雲社 昭22・5）、あるいは、坂口安吾の「墮落論」（『新潮』昭21・5）。

太宰は、本作「トカトントン」において、「マタイ伝」十章二十八節に含意されているイエスの生き様を模範に、逆境を恐

れずに前進することを薦めている。その意味では、本作「トカトントン」は、戦後日本社会の《再生の原理》を太宰流に示した作品であったと言つてよい。

〔注〕

- (1) 遠藤祐「ふたつの音」(『太宰治』4 洋々社 昭63・7)。ただし、引用は「太宰治の《物語り》」(翰林書房 平15・10)。
- (2) 金美亨「トカトントン」論(『中央大学国文』平14・3)。
- (3) 本作「トカトントン」は、宮城県在住の帰還兵保知勇二郎という人物から太宰に送られてきた手紙にあった「トンカチの音」にヒントを得て成立しようだが(昭和二年九月三十一日付け保知勇二郎宛書簡『太宰治全集』第十一卷、保知勇二郎の回想に照れば、その「トンカチの音」は「椅子の脚を修理しはじめ」る音であったという(保知勇二郎「トカトントン」と私)、『太宰治全集』第八卷「月報」筑摩書房 昭31・5)。(《修理》、すなわち、前述した「トカトントン」の音がこの時代を持つイメージと同じく、壊れる以前の元の状態に取り戻す音であったのである。太宰はこのイメージを作中の「トカトントン」の幻聴の意味作用としてそのまま生かしているのである。
- (4) 神谷忠孝・安藤宏編『太宰治全作品事典』(勉誠社 平7・11)「トカトントン」の項において、神谷忠孝氏によって明らかにされている。「三等郵便局」という名称は、すでに、昭和十六年一月に廃止され、「特定郵便局」と改称されていた(明治四年「郵便取扱所」として出発し、明治十九年「三等郵便局」と改称されていた。小川常人(『特定郵便局制度史』示人社 昭58・9)は、「三等郵便局」から「特定郵便局」へ改称した理由に、「三等郵便局」の「三等」という語句には「三等局蔑視の念」が付きまわっていたのであり、局員を「卑屈」にさせる言葉であったという。これは想像に難くない。「特定」(十のイメージ)と言わず、あえて「三等」の語句を使っている局員の《私》は、この二重の思いを込めてこの言葉を使っているのである。それは結局、自己卑下であると同時に、現在の《私》自身を認め

(6)

ようとは思えない思いの裏返しであったといえるのである。

これについて、先行論の中には、この一節を聖書の文脈とは異なる観点で捉える論考がある。「一文を完全醜態をもおそれぬ人間に対する畏怖として解釈するのは正しい。太宰もそのつもりで使っている。だが、それは太宰の聖句に対する誤解であった」(渡部芳紀「トカトントン」(『国文学解釈と教材の研究』昭42・11)、《身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者》に、^{世の中は}色と欲と欲とありきる叔父を想定すれば、《身を殺して靈魂をこらし得ぬ者》すなわち精神主義者「私」という構図がうかがえる」(神谷忠孝「太宰治全作品研究事典」(勉誠社 平7・11)「トカトントン」の項) というのがそれである。たしかに、自己の精神性を誇示し、「三等郵便局員」の自分を認めようとなない《私》、さらには、徹底抗戦を促した将校を前者のそれとして見ることは可能である。そして、「専門学校」を出た後、おそらくは彼の意志に反して家業を継いでいる伯父、「色と欲」の世界を一生懸命生きる花江を後者のそれとしてみることは可能であろう。しかし、実際、この解釈は成立しがたいように思われる。なぜなら、太宰が「トカトントン」より約半年後に発表した「斜陽」作中において、主人公《かず子》は、事実、この一句を聖書の文脈と異なる意味で使っている(『太宰治全集』第九卷 一二六項。「トカトントン」作中のこの一句を聖書の文脈から切り離し、太宰という主体の個別的で特殊なコードをもつて解釈しようとする論考は、「斜陽」におけるこの用例を強く意識している。しかし、「斜陽」におけるこの一句の使われ方は、けっして、渡部芳紀氏が言うような「太宰の聖句に対する誤解 からくるものではない。当該場面を細心深く読んでみると、《かず子》は、この一句が「マタイ伝」で担う意味を知りながらも、敢えてその意味をずらしているのである。「斜陽」において、聖書の語句をその本来の意味からずらすのは《かず子》に限られたものではない。「羽の雀は一線」とは、ありや高いんですか？ 安いんですか？」と「マタイ伝」の一句を離したてる、酒場における上原一行の会話にもそれは認められる。聖句の権威を反転させてしまう姿勢は、既成の価値観に囚われることを嫌う上原一行の生き方の特徴づけ

ているのだが、〈かず子〉の場合も同様なことが言える。それまで彼女を拘束していた既成の諸価値観に「戦闘開始」を高々と宣言し、「道徳革命」に出発する〈かず子〉の変貌ぶりを象徴して表しているのである。このことは、太宰が当該聖句の聖書学上の意味に精通したうえで、「斜陽」の作品世界を構築するために、それらを敢えて聖書の文脈からずらしていることを自ずと物語るのである。太宰が「マタイ伝」十章二十八節の「マタイ伝」における意味合いを深く理解していたことはまず間違いない。ただし、「トカトントン」においても、「斜陽」と同じく、作品世界のために、あえてその文脈をずらしている可能性は十分にある。本稿は、その可能性を認めつつもその解釈を保留し、聖書の文脈を積極的に作品と関連付けようとしたものである。

(7) 『新共同訳新約聖書注解』（日本基督教団出版局 平3・7）

(8) 高橋三郎『マタイ福音書講義（上）』（教文館 平2・3）

(9) この一節に対する聖書学の理解を歴史的に辿ってみると、たとえば、明治中年刊行された『聖書之友研究』（明26・6）「日々のすすめ」における〈身を殺して云々〉は不信者をいふという解説や、『聖書之友』（昭5・2）「昭和五年第三月分日課説明」における〈懼るべき者は神以外にはない〉という解説、あるいは、同誌「昭和十三年度第一月分日課注解」（昭12・12）にみられる〈権なきものを恐るな、實際権力あり又保護しうる力ある者を畏れよ〉という理解、さらには、『聖書研究』（昭18・4）の「新約註解・おそるな」における石島三郎の〈神を畏る者は神以外のものを懼れず、神を畏れざる者は神以外のすべてを懼れる〉という註解が示すとおり、その解釈は明治から現在にいたるまで一貫している。

(10) 花田俊典『太宰治語録辞典』（別冊国文学『太宰治事典』（學燈社 平6・5）「無学」の項）には、〈無学〉は、太宰治の作品にあつて、

二様のニュアンスをもたされている。一つは、「ひとのよい無学ではあるが利巧な、若く美しい妻」（『逆行』）、「無学無思想の男」（『トカトントン』）といった具合に、いわば素材で簡潔な一途さを肯定的にイメージする場合」とある。

(11) 引用は、昭和三年一月一日付け『朝日新聞』、「人間」（昭和三年一月号「編集後記」）、「中央公論」（昭和三年一月号「後記」）、「新潮」（昭和三年一月号「編輯後記」）の順。

「トカトントン」をはじめ、太宰作品の引用は『太宰治全集』（筑摩書房 平1〜4）に拠った。

（オム デハン 筑波大学大学院博士課程

文芸・言語研究科 学際カリキュラム）